わが町
わが村

上益城郡矢部町
緑と水と通潤橋の町

県下一の広大な町

九州高速自動車道の御船並びに松橋インターから矢部町の中心地浜町まで、いずれも乗用車で一時間もかからない。昔、砂利道でたどったこのコースも今では隔世の感がある。

矢部町は、行政面積約三百平方キロメートル、県下一の広大さを誇り、北に世界に冠たる阿蘇の外輪山がそびえ、一方南部は、国定公園として指定された九州山地が国見岳を先峰として連なり、宮崎県と境界をなしている。平均気温一四・二度、降水量年間二、四三九ミリと準高冷地である。

矢部町の中央を東西に貫流するのが緑川で、深い渓谷を刻み、町内全ての川がこの上・下流で注ぎこむ。これらの河川が彫刻した渓谷と矢部四十八滝は、内大臣峡と五老ヶ滝を盟主とするが、それぞれにまつわる伝説と個性あふれる姿を競い、圧巻である。

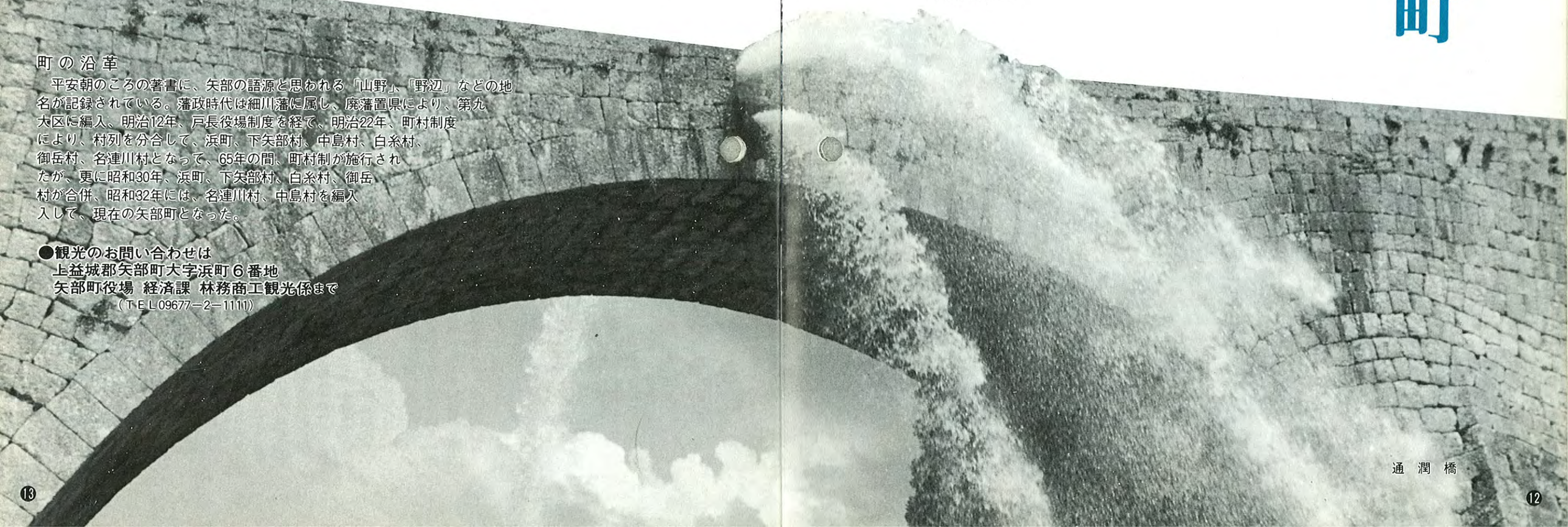
町のシンボル通潤橋

町のシンボルは重要文化財に指定されている通潤橋である。谷をまたぎ、三本の灌漑用水管を抱き、時に土砂吐きから勢いよくほとばしる水は水煙となり、虹を描いて地をたたく。一八五四年に時の庄屋布田保之助が橋本勘五郎を石工として完成させたものである。これにより白糸台地の百町を超える沃田を開墾せしめた。笹原川からの導水路は地をはい、岩をうがって延々六キロも流れて通潤橋を渡っている。水量コントロールの技法にも昔の人の精緻な工夫を垣間見ることができる。

秋風を肌に感じ始める九月の第一土・日曜日は、八朔祭が三百年の伝統をうけついで催される。

林野に産するすすき・松笠・竹等の素朴な質感を巧みに利用した大型の造り物が町内を練り歩く。

八朔祭の造り物


通潤橋

観光施設も充実

九州自然歩道は南阿蘇外輪コースが整備されているが、落合直文の孝女白菊の一場面でもある駒返り峠を通っている。深山を走るこのコースは起伏と眺望に恵まれ、時として野猿に遭遇することもあり、スリルに満ちたコースとして近年人気をえつつある。

約千六百ヘクタールの大矢野原は現在陸上自衛隊の演習場として活用されているが、阿蘇外輪の雄大な裾野であることを一目瞭然に理解できる眺めである。初春の野焼は壮観で、火舌が枯野を一気になめつくし、一瞬のうちに黒野に変身する。初夏ともなると緑野に衣替えし、女性的な起伏は眼に優しく、ぜんまい・わらび等が萌え出る。国民宿舎通潤荘も通潤橋・プール・体育館・ゲートボール場・町営グランドに近く、山菜料理が好評である。ゴルフ場は熊本からも近く、盛況を呈している。

評判のよい矢部の茶
男成地区の茶畑

複合経営で成果をあげる

産業面では、山村地帯であり国有林も七千ヘクタールを超える面積があり、林地は町土の七二%程度を占めているものの例にもれず不振である。それでも近年間伐材の動きが活発になり始め、将来において林業蘇生が期待される。農業は、後継者にも恵まれて複合経営に著しい成果をあげている。昭和五十五年の農業センサスでは一九七四戸の農家がありこのうち専業農家は五一一戸である。特に北部地区では昭和四十八年に着工された国営農地開発事業により五百ヘクタールを超す畑地が造成され矢部の高冷地野菜の団地として確実な競争力をつけて来た。また、同地区の養蚕は経営規模も大きく近代化され、養蚕業のモデル的地位を目指している。

農業総生産額は推定で約五十億円程度であり、米・茶・肉牛・椎茸・竹の子・高冷地野菜のトマト・ピーマン・キャベツキュウリ等が産物として出荷されている。今後は作付管理等を総合的にコントロールして矢部の農業所得を増大させ、更に農産物を原料とする一・五次産業の育成を図る必要があろう。

町の沿革

平安朝のころの著書に、矢部の語源と思われる「山野」、「野辺」などの地名が記録されている。藩政時代は細川藩に属し、廃藩置県により、第九大区に編入、明治12年、戸長役場制度を経て、明治22年、町村制度により、村列を分合して、浜町、下矢部村、中島村、白糸村、御岳村、名連川村となって、65年の間、町村制が施行されたが、更に昭和30年、浜町、下矢部村、白糸村、御岳村が合併、昭和32年には、名連川村、中島村を編入入して、現在の矢部町となった。

●観光のお問い合わせは
上益城郡矢部町大字浜町6番地
矢部町役場 経済課 林務商工観光係まで
（TEL09677−2−1111）